やって来ると，彼らは当然のごとく外国人で，移民ゆえに難しい場面に直面することが多くあるのだろう．そこでは国の違い，境界を強く感じることになるのかもしれない．ミャンマーが政治的変化の過程にある中で，これから彼らの生活はどのように変わっていくのだろうか．タイ側への支援が徐々に減少し，ミャンマー国内に移行していることは，当該地域に暮らす移民の人々へ大なり小なり影響を与えるはずだ．

メーソットで移民として暮らす人々との交流を通じて，国と国との「境」というものを初めて近くに感じることができた．そこで私が見た国境は，簡単に越えられる線のようにも思えるし，やはり明確に区切られた大きな壁のようにも思える．現地の人々にとっての国境は，どのような意味をもっているのだろうか．

こんにちは，カザフスタン！

──アルマトゥのカフェ巡り──

李　　眞　恵*

ソ連の崩壊後，独立を遂げたカザフスタンは，ウズベキスタン，タジキスタン，クルグズスタン，トルクメニスタンとともに中央アジアの一員であり，130 の民族を抱える多民族国家である．また，「コリョ・サラム」と呼ばれる約 10 万人のコリアン・ディアスポラが住んでいる国である．筆者は，現代カザフスタンにおけるコリョ・サラム社会の動態に関する研究をしている．2015 年，カザフスタンへ赴いた．4 年ぶりに訪れたカザフスタンの雰囲気は，相変わらず生き生きとしていたが，前よりも，人々の間にすこし余裕が感じられる．こんにちは，カザフスタン！

日本や韓国より高緯度に位置するカザフスタンに到着すると，間違いなく頭痛に見舞われる．頭痛を癒してくれる現地の温かいチャイ（お茶）を飲もうと，私は喫茶店を探しにホテルを出た．カザフスタンの人々は日ごろから，老若男女関係なく，紅茶を飲むことを愉しみにしている．紅茶への嗜好性が強いためでもあるのだろう，以前カザフスタンに滞在していた頃は，「カフェ」という特別な場所でコーヒーを飲む人々を目にしたことは，ほとんどなかった．しかし，4 年ぶりに訪れたアルマトゥでは，コーヒーを提供するカフェが目に見えて増えている．特に「カフェ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

通り」と呼ばれるある通りには，大小さまざまなカフェが立ち並んでいた．その風景に驚きもしたが，それこそこの 4 年の間に生じたカザフスタン社会の変化といえるのかもしれない．以下はそうした思いを抱かせるにいたった，私のアルマトゥ・カフェ探訪記である．

エピソード 1．D カフェ

入口から一歩入ると，ロシア語の音楽が流れている．ここでは従業員も店長もバリスタも全員女性だ．店長と思われるロシア系の人が，微笑みながら私に挨拶をしてくる．彼女は私を席まで案内し，テーブルにメニューを置いていった．カザフスタンに来て初めて訪れたカフェで，ロシア語の歌が聞こえ，私を暖かく迎えてくれた人もロシア人だったせいか，私はまるでここがロシアであるかのように錯覚した．ここで働く人たちもロシア系かな，と思いながら，私は温かいコーヒーを注文した．

バリスタのところに行くと自然に会話が始まった．コーヒーがおいしかったと伝え，私は日本に留学中の韓国人であり，コリョ・サラムを研究するためにここに来たことを話した．彼女は好奇心に満ちた目で私を見ながら，いろいろなことを聞いてきた．そして，自分はカザフ人だが，ここのオーナーはロシア人であると話した．やはりそうだったか．ふと，カフェ経営者の民族的出自によってカフェの雰囲気やインテリア，音楽などが違ってくるのかもしれないとの考えが湧いてきた．多様な民族が混在して暮らしているため，民族の数だけ多様な文化が共存しているのは当然のことだが，それならば，その多様な文化をカフェを通じて経験してみるのも楽しいだろう．こうして，私のカフェ通いにちょっとした目的ができた．

エピソード 2．U カフェ

この日は何年ぶりかの記録的な大雪が降り，気温もぐんと落ちた．コリョ・サラムの新聞社でインタビューを終えた後，ホテルに帰る道すがら，しばらく体を温めるためにあるカフェに寄った．従業員とみられるひとりが後から「アンニョンハセヨ」（こんにちは）

写真 1　D カフェの職員たちと

写真 2　U カフェの職員

と韓国語で挨拶してくる．びっくりして後ろを見るとコリョ・サラムだ．喫煙スペースが分離されていなかったが，暖かくて居心地のよい場所だ．このカフェでは，ひとりのバリスタと2人の従業員が忙しく動き回っていた（ちなみに，ここではバリスタも従業員も皆男性だ）．私は早速バリスタの元へ行き，話を始めた．彼はウィグル人で，ここのオーナーはトルコ人だそうだ．どうりで，トイレのインテリアが「トルコ風」なわけだ．私たちの話を聞いていたもうひとりの従業員は，「オーナーはトルコ人，バリスタはウィグル人，私の同僚はコリョ・サラム，あなたは韓国人の日本留学生，そして私はカザフ人だ」といい，「こうして全員が集まったのは面白いことじゃないか，これでこそカザフスタンだ！」と，愉快そうに笑った．私も笑った．

カザフスタンは外国人という区別，あるいは外国人というその単語自体が大きな意味をもたない国であるようだ．実際に街を歩いていると，私に何ら憚ることなく，道を尋ねてくる現地の人たちに頻繁に出会う．私の国籍がどこかは関係なく，私のロシア語やカザフ語がどれほどうまいかとも関係なく．それだからなのか，私はもっと自由にもなれ，さらに楽しくもなれ，このカフェでそうであったように，彼らとより容易に，より早く友達になれることもある．このコーヒーの味は長らく記憶に残りそうだ．

エピソード3．Hカフェ

また別のあるカフェを訪れた．ここはインテリアや従業員などの雰囲気だけでは，どんな文化が根底にあるのかまったく分からない．私はバリスタのところに行った．コーヒーを注文した後，話を始めた．バリスタ本人だけでなく，ここのオーナーもカザフ人だそうだ．そういえば，耳にしたことのあるカザフ歌謡が聞こえてくる．カザフの大衆歌謡は日本の演歌とリズムが似ている．面白かったのは繰り返し聞こえてくる歌詞だ．「結婚もせずに，結婚もせずに，あちこち見に通っている女…」まるで私のために準備してくれたバックグラウンドミュージックではないかと思った．席に戻ると，ロシア人と思われる従業員がコーヒーをもってきてくれた．私

写真3　Uカフェのトルコ風のお手洗い

写真4　Hカフェ

はカザフ語で「どうもありがとうございます」と挨拶を交わした．すると彼はカザフ語で「あなたはカザフ人ですか？」と聞いてくる．ロシア人がカザフ語で話すことはカザフスタンでは珍しいケースだが，嬉しい気持ちになって，カザフ語で会話を続けた．彼は子どもの時から，カザフ語とロシア語を学んでいたため，ロシア語しか話せない一般のカザフ人よりずっと良かったと誇りに思っているとのことである．

実際，日常生活では，ロシア語が何の制約もなく使用されているため，カザフ語を完璧に駆使できないカザフ人も多い．しかし，4 年ぶりに訪れたカザフスタンでは目に見えてカザフ語の看板が増えており，街でもカザフ語がより多く聞こえてくるように感じた．この間に，日常生活でもカザフ語の必要性が増大しているのではないか．実際に，日常生活で出会った人々は，カフェ巡りをし，カザフ語を話す外国人の私を，不思議そうに見たり，褒め言葉をかけてくれたりし，また時には品物の値段をまけてくれることもある．

エピソード 4．スターバックス

2015 年 12 月に，中央アジアで初めて国際的なコーヒーチェーン店であるスターバックス 1 号店がカザフスタン・アルマトゥにオープンした．

最近，紅茶文化圏であるカザフスタンでコーヒーを好む人たちが増加したためか，それともグローバル企業の進出とそれに対する呼応なのか，どちらかは正確に分からないが，スターバックスの開店は「中央アジア初」というキャッチコピーとともに，現地でもたいへん話題になった．開店初日には，開店記念特別行事があったため，アルマトゥでは珍しい大行列が，お店の外まで続いていた．1990 年代初頭，ロシアで初めてマクドナルドが開店した時，異例なほど大勢の人が行列に並んだのと同様に，ここでも人々はコーヒーを飲みに来たというよりは，好奇心で集まって来たように思われた．

それから一年が経って，再びアルマトゥのスターバックスを訪れた．コリョ・サラムの K 教授との 1 時間あまりのインタビューを終えた後，ホテルに戻る道中，私もまた好奇心を抱えながら立ち寄ってみた．お店の中は週末の午後を楽しむ人々で混んでいた．彼らの手元にあるのは，間違いなく，紅茶ではなく，コーヒーだった．これは，日常生活の中でコーヒーを楽しむ人々が増えたこと，あるいは紅茶文化圏であるカザフスタンでコーヒー文化が根付き始めていることの一面ではないか．

この日のインタビューはコリョ・サラムの

写真 5　カザフスタン・アルマトゥのスターバックス 1 号店

アイデンティティに関するものだった．K 教授が考えているコリョ・サラム・アイデンティティは，言語よりは，コリョ・サラムが子どもの時から守ってきた慣習，つまり民族文化や冠婚葬祭などの儀礼に関連づけられており，特に食べ物と食生活が重要な要素になっている．K 教授は文化の中で最も変化する速度が遅いのは「味」だろう，つまり，変化に対して「最も保守的なのは口」だと言っていた．そうだとしたら，最初にどんな味覚に慣れるかによって，アイデンティティの一部が形成されるはずである．子どもの時からスターバックスやマクドナルドなど，ファストフードを経験してきた私はそれらに馴染みがある．それらは私の生活の一部分になっており，アイデンティティの一部分でもあるだろう．このように，アルマトゥ市のような都市における急速な食文化の変化は，やがてカザフスタンのコリョ・サラム・アイデンティティにも，世代間の大きなギャップを生むかもしれない．

紅茶好きというよりはコーヒー好きの私にとって，不慣れな場所でユニークなカフェを探し，その土地のコーヒーを味わうことは，人生の楽しみのひとつでもある．カフェの増加やグローバル企業の展開など，カフェ巡りを通じて，変わりゆくカザフスタンを経験するのは私にとって実に興味深いことになった．次に訪れる時には，またきっとカフェが私を温かく迎えてくれると思うが，今度はぜひ，コーヒーを飲みながら，カフェとコリョ・サラムについてじっくり観察し，考えてみたいものである．

The Revitalization of *Waqf* (Islamic Endowment) for Social Well-Being in Malaysia

Nur Izzati Binti Mohamad Norzilan*

1. Definition of *Waqf*

The *waqf* which is also spelled as *wakaf* or *waqaf*[1] is an institution of donation with a long tradition in Islamic practice that has

* Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

1) The word *waqf* also spelled as *wakaf*, *waqaf* or sometimes *awqaf* (plural) is the variation of spelling usually used depends on the researcher, location or country. In English, *waqf* is usually used. In case of Malaysia, *wakaf* and *waqaf* spelling are commonly used and understand by the society, which *wakaf* spelling translated as according to the Malaysian language. While *waqaf* used to show the understanding of the society on the spelling as according to the Arabic words.